

助産師のきく～聞く・聴く・訊く・効く～力

－「聞く・聴く・訊く」を「効く」につなげる－

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部
学部長・教授 村上 明美



皆さんは「産婦の身体の声」 きいていますか？

ここでいう「産婦の身体の声」とは、
産婦から発せられ、産婦の状況を示す何らかのサイン
であるとイメージしてください。



特集
産婦の身体の声をきく
アセスメント能力を高めよう

助産雑誌, vol.69, 2015.



『聞く・聴く・訊く』とは？

きく（聞く・聴く・訊く）の意味

- 聞く：音を耳で感じ取る。自然に耳に入ってくる。
⇒（英）hear
- 聴く：注意深く耳を傾ける。内容をより深く理解しようと自ら耳を働かせる。⇒（英）listen
- 訊く：尋ねる。問う。⇒（英）ask

助産師の「聞く・聴く・訊く」の例

■ 聞く：予期しないことに気づく

助産師は、担当の産婦の観察を終えて廊下を歩いていると、隣部屋で分娩監視装置を装着している産婦の胎児心拍数が除脈になっているのがきこえ、すぐに訪室した。

■ 聴く：注意深く観察し、今後の対応を考える

助産師は、胎動減少を主訴に入院した産婦に分娩監視装置を装着し、胎児心拍を注意深くきき、胎児の健常性を評価した。

■ 訊く：詳細な情報を尋ねる、または意思を確認する

助産師は、腹痛で入院となった産婦に、どのような痛みか、いつから痛みに気づいたのかを詳しくきいた。

なぜ、産婦の身体の声をしきく必要があるのか？

分娩期のダイナミックな変化

- ➡ 陣痛により子宮口が約10cm開大する
- ➡ 胎児が回旋しながら産道を通過する
- ➡ 胎児が娩出した後、続いて胎盤が剥離、娩出する
- ➡ その後、子宮が急速に収縮する

産婦は、数時間内に自分に生ずる様々な症状や変化を、主訴として具体的に言葉にすることは難しい。

分娩期に、言葉（音）で表される産婦の身体の声はほんの一部で、むしろ多くの声は言葉（音）にされない。

「産婦の身体の声」の特徴

▶ 音としてとらえられる

産婦の言葉

胎児心拍の音

【例】

「腰がわれるように痛い」

「いきみたい～」

徐脈・頻脈

▶ 音としてとらえられない

産婦の行動

胎児心拍数基線細変動

【例】

腰に手を当てて身体をよじる

陣痛発作時に息を詰める

基線細変動の減少・消失

具体的な事例①：聞く

陣痛発来で入院した3回経産婦のAさん。陣痛開始から11時間が経過したが、分娩に至っていない。

入院時は子宮口開大3.5cmであった。入院から10時間後の内診所見は、子宮口開大5.5cm、展退50%、児頭の位置+1である。陣痛は、間歇4分、発作40秒で、陣痛室で経過をみている。

B助産師が陣痛室の前を通りかかると、突然「あぁぁ～」というAさんの声が陣痛室から聞こえた。

その声から、B助産師はAさんの分娩が急に進行したのではないかと推測し、速やかに陣痛室に向かった。



事例①の解説

- 事例①の場面では、B助産師はAさんの声をきこうと思ってきいたわけではない。きこえてきただけである。
- たまたま陣痛室の前でAさんの声を耳で感じ取り、声の様子から「分娩が進んだのでは？」と推察し、急ぎ部屋を訪室するという行為に結びつけている。

具体的な事例②：聴く

子宮口全開大で分娩室に入室している初産婦のCさん。努責をかけ始めてから陣痛に伴って胎児心拍に軽度の変動一過性除脈がみられるようになり、担当のD助産師は医師に状況を報告した。

D助産師は、Cさんの努責を調整しながら、分娩監視装置による胎児心拍モニタリングを継続し、胎児心拍数波形の変化を注意深く観察した。

その後、高度の変動一過性除脈が見られるようになり、胎児心拍数波形がレベル3からレベル4へと変化した。

D助産師は、急ぎ医師の立会いを要請し、急速遂娩および新生児蘇生の準備を行った。



事例②の解説

- ▶ 事例②の場面では、D助産師がCさんの胎児心拍数の変動を気にかけて、Cさんの努責を調整しながら、注意して能動的に耳を傾けている。
- ▶ そして、胎児心拍数波形レベルの変化から、急速遂娩が必要かもしれないと判断した。
- ▶ 速やかに医師の立会いを要請し、急速遂娩や新生児蘇生の準備をするというハイリスク分娩への対応の行為に結びつけている。



具体的な事例③：訊く

陣痛発来の主訴で入院した初産婦、Eさん。入院時の診察で破水を確認し、うっすらと羊水が混濁していた。

入院診察を行ったF助産師は、入院の主訴として破水の訴えがなかったため、Eさんに「自宅で破水した感じはなかったか」「帯下に色がついているようなことはなかったか」などをたずねた。

診察後、F助産師はEさんを陣痛室に案内し、分娩監視装置を装着して胎児の健常性を確認した。その後、担当の医師に入院診察の結果を報告した。



事例③の解説

- 事例③の場面では、陣痛発来を主訴に入院したEさんであったが、F助産師が診察すると既破水であり、さらに軽度の羊水混濁を認めた。
- F助産師は、その状況を予期していなかったため、破水の時期や羊水混濁の自覚について、Eさんに問いかけて確認を行っている。
- そして、破水の影響を念頭におき、Eさんに分娩監視装置を装着して胎児の健常性を確認するとともに、入院診察の情報を医師と共有することで、胎児の安全を確保する行為へと結びつけている。



産婦の身体の声なき難しさ

助産師は、
聞く・聴く・聴く³の行為を同時に展開しながら、
= 複合的に「きく」

産婦の状況を深く理解し、その先を予測し、
産婦に最適な（と思われる）ケアを提供していく。



複合的に「きく」とはどういうことか？

事例で考えてみましょう。

事例④

36歳の初産婦、Gさん。本日40週5日である。予定日超過にて分娩誘発の目的で明日入院予定となっていた。今朝5時に陣痛が発来し、7時に入院となった。

H助産師による入院診察では、内診所見が子宮口開大2.5cm、展退20%、児頭の位置-2、子宮口的位置 中、子宮口の硬さ 中、であった。

入院時の胎児心拍数陣痛図では、陣痛は間歇6分、発作40秒、胎児心拍はbaseline 130bpm、variability正常、一過性除脈なし。

Gさんは「自然に産めたらうれしいけど...。夜間寝ていないし、痛いから今は横になりたい」と言い、食事とトイレ以外はベッド上で過ごしていた。

入院から6時間経過した（13時）が、内診所見や陣痛にはほとんど変化がない。

事例④の解説

- ▶ Gさんから「自然に産めたらうれしけど...、夜間寝ていないし、痛いから横になりたい」と聞いた (**hear**)
H助産師は「明け方の入院で寝不足だろうし、赤ちゃんも元気で、陣痛もまだ弱いから、今は休んで分娩に備えたほうがよい」と考え、産婦の意思を尊重したと思われる。
- ▶ 内診の所見や陣痛を注意深く観察することは、音としてとらえられない産婦の身体の声を聴いて (**listen**) いることになる。
- ▶ これにより、助産師は分娩があまり進行していないこと、陣痛は有効ではないことを判断することが可能となる。

事例④の解説（続き）

- このとき考えられる助産師の介入は、少なくとも2つ。
 - ① 分娩が進んでいないので、少し動いて陣痛を強めては？
 - ② もともと明日が誘発予定だから、このまま様子見ては？
- 胎児の健常性が損なわれておらず、急いで分娩に導く必要がないなら、どちらも選択肢としてありうる。
- したがって、助産師はGさんがどちらを希望するのかを訊いて **(ask)**、産婦の意思を尊重するのがよいだろう。

事例⑤

31歳の1回経産婦、Iさん。本日38週3日である。陣痛発来にて10時に入院となった。

J助産師による入院診察では、内診所見が子宮口開大3.5cm、展退30%、児頭的位置-3、子宮口的位置中、子宮口の硬さ軟、未破水であった。陣痛は間歇5分、発作30~40秒で、まだ余裕のある表情をしていた。胎児心拍はreassuringであった。

入院から2時間、Iさんは「腰が割れるように痛くて…」と言った。J助産師が内診すると、子宮口9cm、展退60%、児頭的位置±0、胎胞が緊満していたため、J助産師は分娩の準備を開始した。

J助産師は、Iさんを分娩台に乗せ、外陰部を消毒しようとしたが、Iさんが腰をよじってしまい、臀部を分娩台につけることができない。

事例⑤の解説

- ▶ 助産師は、入院時の内診所見や余裕のあるIさんの表情から、音としてとらえられない産婦の身体の声をも聞き/聴き（**内診所見はlisten、表情はhear**）、慌てて準備する状況ではないと判断したと考えられる。
- ▶ 2時間後「腰が割れるように痛くて…」と聞き（**hear**）、分娩が急速に進行したのでは？という予測のもと、速やかに内診を行い（**listen**）、分娩進行を確信している。
- ▶ 助産師は、分娩の準備をしようとしたが、Iさんは腰をよじって分娩台に臀部をつけられない。この時、助産師が産婦の身体の声をもどう聞いた（**hear**）かが、次の助産師の行動を方向づけるカギとなる。

事例⑤の解説（続き）

- ➡ 助産師は、まずIさんに「腰をよじらず臀部を台につけることができるか？」と訊く **(ask)** だろう。そして、やはりできなければ、なぜ腰をよじってしまうのか、理由を考えるだろう。
- ➡ 児頭が骨盤に陥入していないからか、不正軸侵入なのか、回旋異常があるのか、陣痛が強すぎるのかなど、予測できるあらゆることを想定し、ひとつずつ否定していく。
- ➡ その際も、産婦を注意深く観察し、音としてとらえられない産婦の身体の声を聴き **(listen)** ながら判断していく。



産婦の身体の声を聴く感性 = 高度なアセスメント能力

- ▶ 助産師は、きき方（聞く・聴く・訊く）を駆使して、産婦の表情、行動、感情、内診所見、胎児心拍数波形、陣痛の強さ、胎動など、多様な情報を多面的に収集し、判断し、産婦の全体像を捉え（ようとし）、その後の経過を予測する。
- ▶ そのためには、助産師の「**気づきの感性**」が必要となる。現場で、「あれ、いつもと違う」「ちょっと気になる」と瞬時に気づく第六感的な感性である。

あなたなら、どのように「きき」ますか？

GW事例

19歳、初産婦Aさん、39週3日。夫から「夜2時ころから下腹部痛があって眠れない」と4時に病院に電話が入った。

電話の対応をした夜勤の助産師は、夫にAさんと直接話したいと伝えた。Aさんは、はじめは「痛くて電話に出られない」と言っていたが、やっと電話に出た。

助産師は「どんな風に痛いのか話してくれますか」と尋ねたが、Aさんは「ず〜っと痛くて、どんな風になんて話せない」という。



各グループで

産婦の声をきいた体験を話し合ってみてください



では、『効く』とは？



きく（効く）の意味

- 効く：効果や働きなどが現れる。
期待どおりのよい結果が実現する。
⇒（英）be effective

「聞く・聴く・訊く」は助産師の行為
「効く」はその結果（状態）を表す表現
何らかの操作や介入によって、期待した変化が生じているという意味



理想的には、

助産師の「聞く・聴く・訊く」行為が

⇒産婦に「効く」のが望ましい

産婦の身体の声をかきいている助産師たちの語り①

妊娠中から継続して一人の妊産婦さんにかかわっていれば「その人の人となり」がわかっているのです、産婦の身体の声は本番では面白いようにきけます。つまり、アセスメントが容易です。

でも、お産で「初めまして」の産婦さんで、情報が電子カルテのデータのみでは、産婦の身体の声は前者の場合よりききとりにくいです。

電子カルテには、「この方はガラスのように繊細なハートの持ち主」とか「この方は気丈夫で痛みには強いタイプで安産そう」といった、妊娠中にかかわった専門職の非常に個人的なアセスメントまでは書かれていません。でも、実はそういったことが一番有力な情報だったりします。

結局、この人はどうゆう人なのか、私はこの人を安産に導くために何をしたらいいのか、...常に変わりゆく産婦の身体の声、瞬時に、かつ的確に、どんなに限られた状況下であってもアセスメントし続けること、それが「かゆい所に手が届く」ようなケアとなり、結果、安産につながるのだと思います。

産婦の身体の声をかきいている助産師たちの語り②

分娩の進行を注意深く観察するのはもちろんですが、産婦と助産師の間には、妊娠前や妊娠中から築いてきた大きな信頼関係があります。その信頼関係の上に立って分娩を迎えるので、産婦の身体の声がかきけるのだと思います。

私たち助産師は、自分の判断だけでなく産婦本人の自覚や感覚を信じています。ある経産婦さんは、冷静に自分の分娩進行を感じていて、前回に比べて体力がない、お産の時に踏ん張れないと思っていたそうです。私たちに「お味噌汁が飲みたい」と求めてきました。味噌汁を飲んで、その方は自分の身体にエネルギーが湧いてくるのがわかったそうです。

産婦自身も、自己の身体のかきくことができるのだと思いました。それを助けるのも助産師の役割です。

産婦の身体の声をかきいている助産師たちの語り③

われわれ助産師は、分娩の時に産婦の「産む力」を引き出すことを大切にしています。「産む力」を引き出すためには、産婦にそっと寄り添って、産婦の些細な身体の変化に気づける観察力（見て、触れて、感じる力）が必要です。それが、産婦の身体のかきくということだと考えています。

われわれ助産師は、産婦の気持ちの焦りや心配事などを一つ一つを取り除き、産婦が自分で「産む力」を最大限に発揮できる空間（環境）をつくりだせるようにお手伝いをします。

その結果として、産婦は「自分で産めた、満足のいくお産になった」と達成感を得られ、同時に助産師も専門職としての達成感を抱くことができるのだと思います。



「聞く・聴く・訊く」を 「効く」につなげるヒント

- ➡ 継続的なかかわり
- ➡ 個人的に感じ取る
- ➡ 瞬時に、的確にアセスメントする
- ➡ 強い信頼関係
- ➡ 環境を整える
- ➡ 産婦の能動性（自ら感じる・自分で産む）を支える



各グループで

産婦の声を「聞いて/聴いて/訊いて」、

「利いた」体験を話し合ってみてください



最後に...

『利く』について

きく（利く）の意味

➡ 利く：本来の機能を十分に発揮する。

機敏に、さかんに活動する。

例「鼻が利く」「顔が利く」「洗濯の利く生地」

「無理の利かない身体」「学割が利く」

⇒ (英) be profitable

「効く」と「利く」の使い分けは難しい。

通常「効果がある」ときは「効く」を使い、それ以外は「利く」を使う。



実は、これは先ほどの・・・



産婦の身体の声を聴く感性 = 高度なアセスメント能力

- ▶ 助産師は、きき方（聞く・聴く・訊く）を駆使して、産婦の表情、行動、感情、内診所見、胎児心拍数波形、陣痛の強さ、胎動など、多様な情報を多面的に収集し、判断し、産婦の全体像を捉え（ようとし）、その後の経過を予測する。
- ▶ そのためには、助産師の「**気づきの感性**」が必要となる。現場で、「あれ、いつもと違う」「ちょっと気になる」と瞬時に気づく第六感的な感性である。



助産師が第六感を「利かせて」、

「聞く・聴く・訊く」でアセスメントし、
適切なケアを提供すれば、

産婦に「効く」に違いない



ご清聴ありがとうございました。